

No. 75

1986.

9. 1

岐阜の博物館

▽501-32 関市小屋名
(百年公園内)
岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会
TEL(05752) 8-3111(代)
振替 名古屋 6 37909



ペルシャ ブルー

(財) 岐阜県陶磁器陳列館
館長 熊沢輝雄

私がペルシャブルーの華麗な世界に身をゆだねたのは、だいぶん以前、イスラム文化に接するため、この道の世界的権威である、

三上教授にお供をして旅行したイラン・トルコの旅であった。

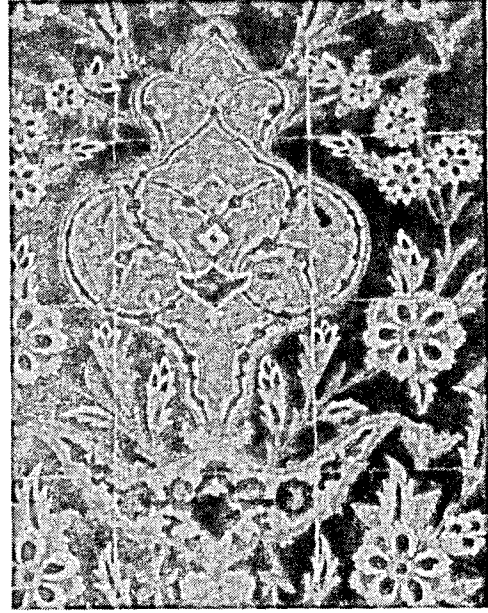
今度の政変でもめにもめているテヘラン、そして南の方のイスファハンという中ぐらいの都市に初めて印した時であろう。

ペルシャブルーや、トルコアースブルー、あるいはコバルトブルーの色は大体初期イスラム陶とは質を異にし、11世紀から12世紀の初めにかけて、一般的には青釉陶器として華々しくデビューした。

このころは、イタリアのルネッサンスより1世紀半ほど早い工芸の復興で、精巧なラスタール陶器、ペルシャ陶器の世界に誇るミナイ(色絵)陶器も制作されるようになった。

当時見られる水注、鉢などに、中国の萌葱金襴手(もえぎきんらんで)の原型ともいべきイラン16世紀の逸品「青地色絵金彩の蓋付壺」の優艶豪華な姿に魅せられた人は少なくないであろう。

これら当時のペルシャの空を思わせるようなブルーは、専門的には、媒溶剤の変化によっておのずから色調の変化を伴った。この時期に使



イラン イスファハンシャーモスクにおける
タイルのアラベスク文様

われた呈色料は、銅が中心であったが、鉛釉ではあざやかな緑となった銅呈色も、アルカリ釉では、華やかなうちにも深く落ち着いた青色となった。しかも単なる青ではない温か味のあるペルシャブルー、白味がかかった気品のあるトルコアースブルー、親しみのあるブルーグリーン、シックなオリーブグリーンとさまざまな色調が、当時の器、タイルをこの世のものと思えないほど美しく飾った。

トルコのブルーモスクにしろ、イスファハンのシャーモスクにしろ、その他イスラムの世界で見られるあの緻密にして華麗なブルーの色調は、ペルシャブルーと一言でいってしまうとそれまでだが、われわれをして恍惚の世界に引きずりこんでしまうだけの力を持っている。

このブルーは、民族を象徴するナショナルスティックな色彩であると断じてもいいだろう。

博物館における“委託調査”と学芸員

平塚市博物館 学芸員 浜口 哲一

神奈川県は、全国的に見て公立博物館が数的にも人的にも充実している県の一つだと思う。現在もいくつかの市で、新しい博物館の建設準備が進んでおり、これらが開館すれば、きめの細かいネットワークをいかした活動もできるのではないかと期待している。ところで、最近の建設準備の進み方を見ていると、我々が昭和46年から51年まで平塚市博物館建設準備室として仕事をした当時と比べると、博物館づくりも様変わりしたと思うことがある。

平塚で準備室を作った頃は、準備室を開館の数年前から発足させること自体、またその段階で複数の学芸員を採用して仕事にあたらせるというのは、むしろ例外的なことだった。平塚では開館1年前にはスタッフとして既に8名の学芸員がおり、展示計画を始めとする運営計画を直接担当していた。その後各地で建設された公立博物館でも同様の態勢をとる所があり、平塚はよい傾向に先鞭をつけたと、いささかの自負も感じていたのだった。

ところが、近年の建設準備をみると、その仕事の中への、さまざまな委託調査の占める割合がどんどん大きくなってきているように感じられる。例えばA市の例では、研究者や他の博物館関係者を集めて展示基礎調査が委託された。そこでまとめられた展示基礎調査報告書が、展示製作の骨子として使われようとしている。また同じA市では、民俗・歴史などの資料調査が別に調査団を作って委託され、民具・古文書などの所在目録が発行されている。これらの仕事に、準備室のスタッフとして、学芸員発令を受けた職員も関与しているが、その関わり方は、研究者たる学芸員としてというより、学芸事務的な色合いが濃い。

こうした委託調査によって作られた報告書が、展示業者への設計委託、さらには製作委託へと直結すれば、学芸員不在のままで、博物館がで

きてしまうことも、十分ありうる趨勢が生まれているのである。さらに極端な場合にはB市の科学館のように、館の運営自体を法人に委託してしまう例も現われている。

また別のC館では、館外の専門家をリーダーとし、一般から参加者を募って構成した調査団を作って、それに動植物の分布調査を委託している。調査活動に市民が参加することは、非常に意義の大きいことであり、その意味ではC館の活動は注目され評価されてよいものだと思う。しかし、その委託調査が、自然史系学芸員の不在のままで、言い方を換えれば不在を補う形で実施されていることが、長い目で見た場合、博物館にとってプラスなのか、慎重に考えてみなければならないのではないだろうか。

このように博物館を建設したり、あるいは運営したりするうえでの“委託”の増大は、どのような背景で起こっているのだろうか。その最大の理由が、いわゆる行革にあることは明らかである。人員を増やすよりも、金額の多少はともかく一過性の委託料の方が予算化しやすいというのが事務管理サイドの本音であろう。

博物館にとって学芸員が必要不可欠であるという認識が十分定着する前に、行革の嵐が吹き荒れ、学芸員などどこかへふっとんでしまったのではないかというのが、私の分析である。逆に言えば、今、学芸員の役割を、口を酸っぱくして説かなければ、今後、学芸員の身分はますます不安定なものになっていく恐れがある。そのような意味をこめて、学芸員不在の委託調査への批判を2、3書いてみたいと思う。

第一の点は、博物館の活動には全体を通した一貫性が必要であり、ばらばらの委託調査の積み重ねはそれを保障しないということである。先にあげたA市の展示基礎調査報告書は、展示の基本理念から始まっている。これは、別の言い方をすれば、館の活動の基本理念ということ

であり、展示だけではなく調査・収集・普及などの諸活動に密接なつながりを持つものである。それが、実際に館の中で仕事をするスタッフによってではなく、外部の人間によって決められたとしたら、開館後の生き生きした活動が期待できるものだろうか。

平塚では、館の基本テーマを「相模川流域の自然と文化」と定め、フィールドを宣言することで地域博物館のスタートを切った。そしてそれに沿って展示の構想を作るとともに、いろいろな活動計画をたて、さらには個々の学芸員の研究テーマもそのフィールドを尊重して選ぶことで合意していった。

展示をその場限りで作るというのではなく、開館後の調査によって補ったり改めたり、常に新しい情報を提供していくようにするためには、くり返すようだが博物館の全体的活動と一貫したテーマの中で有機的に結びつけていかねばならない。外部の専門家から情報提供や指導を受けることは必要であり重要だが、それを構想にまとめるのは学芸員が中心になって行うのが、もっとも効果的な館運営につながるのである。

第二の問題点は委託に頼った調査では、資料の蓄積が十分はかられない場合が多いということである。たとえば、植物目録を作成してほしいという委託であれば、引き受け手はないだろうが、一種について何点かの標本を作成することを含めて引き受けしてくれる人は少ないだろう。もしいたとしても、一つ一つの標本にきちんとラベルをつけたり、展示にも耐えるように葉をよく開いた美しい標本にしてくれる人はまずいないと思って間違いない。そして、実はそうした良質の資料を蓄積して保存していくことこそ、博物館固有の仕事であり、学芸員がそれを担うべきことなのである。行政上は、委託調査をして、調査報告書ができれば、それで事足れるわけだが、それに伴う実物資料がなければ、博物館としては片手落ちである。このことが十分理解されないままに行われている委託調査には大きな疑念を感じるのである。

資料の蓄積については別のことにふれておきたい。先年、ある博物館を見学させて頂いたところ、収蔵室があまりにがらんとしているので驚いたことがあった。聞いてみると、この館の学芸スタッフは、小中学校の先生方が2・3年のサイクルで回ってきているとのことだった。この態勢では、任期の数年間に自分のテーマで研究をしてみようという人はいても、長い目で見た館のために資料を集めたり標本を作ったりする地道な仕事をやろうという人は、なかなかいないだろうなと思ったことであった。

さて、第三の問題は、地域の市民とのつながりということである。博物館にはいろいろな資料の寄贈や寄託が多い。その動機は地域の文化財としてといった意義に感じてということもあるが、あの学芸員と顔見知りだから安心して預けられるといった個人的な親しみであることもまた多い。ボランティアとして協力してくれる市民とも、学芸員という専門家が館にいて、ただの労力奉仕ではなく、同時に学ぶことの多いギブアンドテイクの関係を持つことができる。ばらばらの委託調査に頼って仕事をしていったのでは、また学芸員スタッフがすぐにかわるような態勢では、市民と博物館の人間的なつながりは生まれにくい。そういう関係を、特定の個人を重視することにつながると嫌う意見もあるだろうが、それは博物館活動の機微を知らぬというものである。

博物館活動の特徴的な性格は、「継続と蓄積」であると思う。それは性急に進んでいる現代の時代感覚にはそぐわないかもしれないし、行政内部の財政や人事のあり方とは合わない面もある。しかし、博物館はその性格によってこそ、いつの時代にも一定の価値を持ちうる機関である。その活動を担う専門家としての学芸員を重視した博物館建設、そしてその運営が行われていってほしいと思う。

「ホンモノ」ってなあに？

(財) 豊蔵資料館 斎藤基生

展示こそ博物館活動の生命である。そして展示物は原則として本物であることが望ましい。ところがこの「ホンモノ」というものなかなかやっかいな代物である。

加藤晋平氏は著名な考古学研究者であるが、氏は考古資料の持つ属性について、内包的属性と状況的属性のふたつがあると述べられている。内包的属性とは、ある石器の石質・形・大きさ・法量・作り方などその石器自体が本来持っている属性のことである。例えば、黒耀石製の、細長い三角形をした、長さ3cmの、打ち欠きによって作られた、石鏃ということである。状況的属性とは、発掘調査時における経験から石器に与えられた属性のことで、石器に付随するまわりの様子のことである。例えば、縄文時代〇〇遺跡の住居址の床面上から出土したシカの骨に刺さっていた石鏃、という石鏃を形容する状況すべてをさす。そしてこの内包的属性と状況的属性の両者が相まって初めて価値あるホンモノの研究資料となりうる。

この考えを博物館の展示資料にあてはめてみたらどうなるであろうか。とりあえず考古資料に限って話を進めよう。

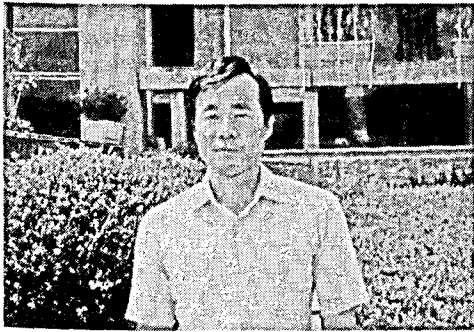
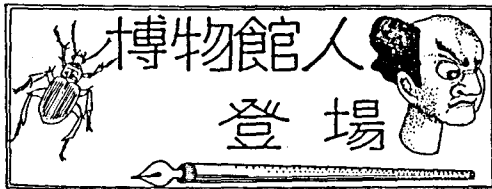
博物館のケース内にある遺跡出土の土器が置かれている。果してこれでホンモノを展示したことになるであろうか。土器の持つ内包的属性は間違いなく満している。しかし状況的属性は土の中から掘り出した時点ですでに変えられている。さらに厳密に言えば、土器が遺跡から出土すること自体、土器が道具として生きて使われていた状況的属性は失われている。つまり土器がものとしてホンモノであっても、状況は作られたものであり本来の姿ではない。逆にレプリカであっても、遺跡出土の土器をモデルにして作られたプラスチック製のレプリカ、という新たな内包的属性を持つ。そして直接手にできないガラスのむこうにある限り、展示されてい

るという二次的な状況的属性は実物を置いた時と何ら変わりはない。

動・植物について、生命活動を停止した標本・剥製は、そうなったことで本来の属性をすべて失っている。では動・植物園はどうか。これとても死んではいないというだけで、動物が自ら鉄サクを組んだりコンクリート製のすみかを作ったり、植物が自ら水や肥料を施したり温室など作ることなどできるはずもなく、作られた状況の中に置かれている。リトルワールドや明治村もひとつひとつの建物は実物であっても、全体として見ればあり得ない状況である。美術工芸品も本来道具として使われるべきものが、ケースや収蔵庫の中に収まっている姿は決して正しい状況ではない。

展示において、内包的属性と状況的属性の両者を満してはじめてホンモノを展示した、といえる。しかし、内包的属性にしる状況的属性にしるそこに込められる意味は時と場所に応じてどんどん変わり、新たな属性を生む。レプリカはそれ自体独立したものとして、レプリカというホンモノになる。状況的属性は内包的属性以上に様々な段階を持って変化する。例えば、土器が作られた姿、使われた姿、捨てられた姿、埋っていた姿、復元された姿、展示されている姿、これらの状況はそのつど常にホンモノであり、第一義的な状況よりもそこから派生した状況の方がはるかに多い。それぞれの段階でホンモノであり、また違う場面においてホンモノでなくなる。

展示の際すべての属性を満すことは不可能であり、何かを捨てなければならない。その時、内包的属性を捨てるのか、またどの段階までの状況的属性を捨てるのか、その見極めが難しい。いずれにしる「ホンモノ」というものは、時と場所に応じていかようにも変わるということだけは忘れてならない。「ホンモノ」ってなあに？



「化石というと、古いものというイメージがありますが、これは地球の歴史を解き明かすものです。化石の持つ意味を考える…。そこに化石の面白さがあります」

高校時代は地学クラブに入るなど、少年の頃から化石のもつ不思議な力に魅了されてきた人が、博物館という機関をとおしてさまざまな活動をされています。

昭和46年、中央自動車道工事に伴って化石調査団が結成されました。この時のメンバーの一人に、奥村好次氏がおられました。この時の化石資料を基にして昭和49年、瑞浪市化石博物館が開館しましたが、その誕生から今日に至るまで、奥村氏は館と共に歩んでこられています。

化石に興味を持っていたとはいえ、化石について本格的に学び出したのは調査団にはいつからで、以後、絶ゆみない研究活動を続けておられます。

化石博物館の教育普及行事の一つとしてサマースタディがあります。小学生を中心とした初級と、中学生以上を中心とした中級に分かれ、化石や地層についての学習活動を行なっています。毎年、数十名の参加者がありますが、運営にあたっての苦勞話をさせていただきました。

「一つは時間です。化石採集、標本のクリーニング、あるいは型をとってスライド作成をするなど、時間をかけてやりたいのが実状です。

瑞浪市化石博物館

おくむらこうじ
奥村好次氏

—化石に魅せられて—

また、テーマ捜しも問題です。同じ内容では参加者は集まりません。時間とも関係しますが、1日や2日でできるテーマに絞るとなると、なかなか思うようなことができません」

そこをなんとかしてゆくのが、博物館職員の腕で、子供たちにいろんな体験をしてもらおうと工夫を凝らしてみえます。たとえば、実習で山を歩きたいが、道がないため、下準備として木を刈っておくなど。

奥村さんの少年時代は、今のような博物館ラッシュの時代でなく、博物館を訪れた思い出はあまりないそうです。そして遊びといえば近くの野山に出かけていた時代。現代は環境の変化によって子供たちの遊びも変わってきています。山に入れない、遊びにくい、親が叱る、などの理由から山をはじめとした自然に親しむことが困難となってきています。

「もっと自然を学ぶことが大切です」

そのため、化石だけではなく、植物、動物に関わる活動にも少しずつ着手し、自然を学ぶ体験を実現させておられます。展示も古環境の復元をモットーに、自然を学びとるモノを生かした展示に努力されています。

先頃、奥村さんは長年に互る博物館活動が評価され、岐阜県博物館協会から表彰を受けられました。開館から12年。調査団の頃からすると15年の博物館活動です。人事移動の激しい岐阜の博物館界にあっては長期勤務といえるでしょうが、地道で特色ある活動をされてこそその表彰です。

「もっと若い人が、これからはどんどん活躍してほしいものです。岐阜の博物館界の体制の近代化も望めます」

今の仕事を「ライフ・ワーク」にしたいと、少年のように目を輝かせて語ってくださった奥村さん。どんどん若手をリードしていただきたいものです。 (M.O)

木質資料の変質変形防止処理法

宮 崎 博

〔目的〕 ながらく地中や水中にあって出土した木質の考古資料や化石資料は、そのまま空中に置くことはできない。空中に置いても変質変形しないための防止処理の1例として、特に展示などに適しているプラスチックによる置換法を紹介する。

〔準備〕

- (1) ポリエチレングリコール #4,000 必要量
- (2) 水中定温器（水中式石英ヒータント200型 100V 200W 15°~35°C用 同等品 例えば岡村保温器製等） 1個
- (3) 水槽（ドラムかん等が便利。一方の底を切り取ったもの） 1個
- (4) 攪拌棒（竹製か木製） 1本

〔方法〕 資料が全部沈む大きさのドラムかんに、水で溶かしたポリエチレングリコールを注ぎ、その中に加工しようとする資料を沈め、水中定温器をセットして、30~40°Cに水温を保ち、毎日1回攪拌する。

そして、下記のように、次第にポリエチレングリコールの濃度を上げていく。以下、ポリエチレングリコールをP・E・Gと略して目安を記載する。

{ 水 70% } 1カ月間
{ P・E・G 30% }

{ 水 60% } 1カ月間
{ P・E・G 40% }

{ 水 50% } 1カ月間
{ P・E・G 50% }

{ 水 40% } 1~1.5カ月間
{ P・E・G 60% }

温度を徐々に常温にもどす。1週間後室内乾燥（完全に乾くまで）

〔付記〕 岐阜県博物館で大型樹根化石をこの方法で処理したが、その後変質変形もなく、出土時と同形態を保って展示されている。処理しなかったものは、水分の発散と共に萎縮して、全く変形してしまった。

〔参考〕

- (1) ポリエチレングリコール #4,000 20kg入り 1袋 17,000円（岩惣商店見積額）
- (2) 水中定温器 水中式石英ヒータット 200型 200W・日本治生産業KK №339 デラックス水中オートマチックヒーター 1本 4,500円（同社見積額）
- (3) 古ドラムかん（上ぶた切断加工品） 1本 5,000円（大兵商店見積額）

第34回 全国博物館大会のご案内

今年度の大会は、九州福岡において、次のようなテーマ、日程で開催されます。

◎テーマ（仮題）

「わが国の博物館の

今までの歩みと今後の展望」

◎日程 11月13日（木）9:00~

14日（金）17:00

・記念講演会「大宰府の成立について」

講師：九州歴史資料館

田村館長

・パネルディスカッション

・部会

・全国博物館会議

・全体会議

◎会場 都久志会館（福岡県教職員互助会）

〒810 福岡市中央区天神4-8-10

福岡県立美術館

〒810 福岡市中央区天神5-2-1

TEL 092-715-3551

どうぞ、ふるってご参加下さい。

東海地区 博物館 連絡協議会 総会報告
日本博物館協会 東海支部

昭和61年度の標記理事会及び総会が、6月10・11日の両日にわたり、岐阜県が当番県となって開催されました。



10日(火)、岐山会館を会場に、理事会・総会がおこなわれ、広瀬 鎮氏(愛知県)、田辺 悟氏(神奈川県)の2氏の表彰があり、諸々の議題が審議され、62年度の開催は静岡県と決定されました。

討論会は「各博物館の現状と課題」というテーマで、各県代表5氏の発表があり、活発な討論がなされました。

「観光と博物館」

三河武士のやかた家康館 堀江登志夫

「山梨県立美術館の現状と課題」

山梨県立美術館 河元 修

「県立神奈川近代文学館の現状と課題」

県立神奈川近代文学館 斎藤 充

「開館記念展をふりかえって」

静岡県立美術館 小針由紀隆

「岐阜市歴史博物館の開館について」

岐阜市歴史博物館 白水 正

語り尽くせない課題については、その夜の懇親会において、和やかなうちに有意義な話し合いがもたれました。

翌11日は、施設見学。岐阜市歴史博物館の館内展示及び最新の収蔵庫等の見学。昼食後には岐阜県美術館を見学し、2日間の日程を終えました。

第4回 岐博協会員研修会報告

「博物館教育活動の企画と運営」

6月28日(土) 13:30~16:30

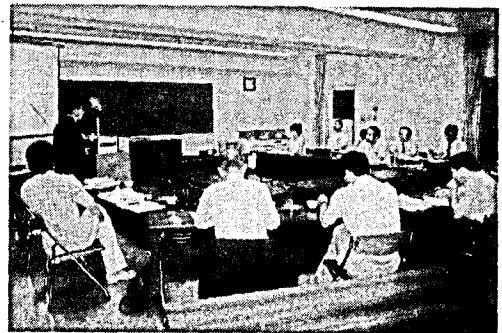
会場 岐阜市歴史博物館

60年度からスタートした、岐博協会員研修会も4回目を迎えました。開館半年を経て、精力的な活動をくり広げている岐阜市歴史博物館を会場に、「博物館教育活動の企画と運営」というテーマで、話し合いがもたれました。

杉山副館長のご挨拶のあと、歴史博物館の教育普及係長・友田靖雄氏に話題提供者となつていただき、「博物館と学校教育」というテーマのもと、貴重なお話を伺うことができました。

今回は、11館(川島ふるさと資料館・高山屋台会館・飛騨民俗村・くすり博物館・豊蔵資料館・大垣歴史民俗資料館・可児郷土館・少年科学センター・地質コンサルタント・岐阜市歴史博物館・岐阜県博物館)から、14名の参加を得て、極めて有意義な会となりました。

会を重ねるにしたがいで、会員相互の人間関係も深まり、研修のみではない十分な効果がうまれているように感じられます。



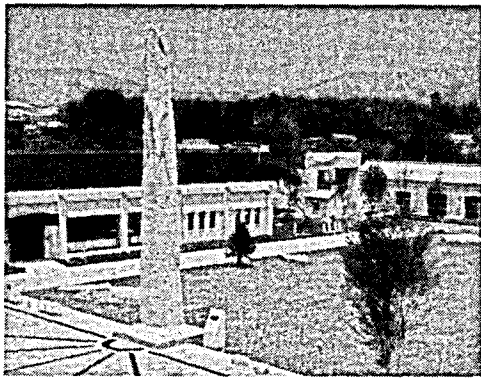
次回は、12月に「資料整理上の諸カード形式と実務処理上の諸問題」というテーマで、博物館の“いのち”ともいえる“もの”の管理・保存・情報システムについて、研修する予定です。ふるってご参加下さい。

博石館のご紹介

石の博物館として開館し、ピラミッド建設等で話題を呼ぶ、蛭川村の『博石館』を訪れました。地元の御影石を使ったすべての面でのスケールの大きさに驚かされます。

「石の可能性を追求し、総合的な石の表現の場をめざし、開館しました」、と語られる岩本館長の夢は、これから更に広がります。

「彫刻のオブジェ」を街道に並べ、「彫刻の村」をつくり、村おこしへと発展させてゆくのです。石の研究、刃物の研究、石材工学といった確かな基盤のもと、コンピューターを駆使したアート工法による石の文化の創造の話を伺っていると、『博物館は未来をめざす』という、本質にせまった素晴らしい博物館の誕生が予感されます。世界の鉱物を収集している後藤慎介氏という専門の研究者を容し、その斬新な活動に期待がふくらみます。



ご案内

いま甦える、石の文化

博石館

〒509-83 恵那郡蛭川村田原

TEL 057345-2110

開館時間 9:00～16:00 水曜休館

入館料 大人500円、小人300円

(団体割引制度あり)

第29回 セミナー大盛況

今年度第2回のセミナーが郡上郡美並村粥川の星宮神社で、8月2日に開催され 100余名の参加者を得て、大盛況となりました。

郡南中学校教頭・池田勇次先生、岐阜護国神社宮司・森盤根先生の講演と、星宮神社・宝蔵殿・粥川の森保全林の見学という盛りだくさんの内容で、新聞等でセミナーの存在を知った一般の方々にとっても、実りの多い会となりました。

第3回セミナーは、岐阜県博物館の開館10周年記念展「ふるさとの祭り」の観覧を10月に予定しています。

催し案内

○岐阜市歴史博物館 9月6日(土)～10月5日(日)
企画展 古地図

— 視界は、ふるさから世界へ —

○可児郷土歴史館 9月3日(木)～11月3日(月)
特別展 郷土の宗教美術

○関ヶ原町立歴史民俗資料館 10月5日(日)まで
特別企画展 班女梅若

○岐阜県美術館 9月20日(土)～10月12日(日)
国立美術館所蔵美術名品展

浜口 陽三展

○岐阜県博物館 10月8日(木)～11月24日(月)
開館10周年記念展

ふるさとの祭り

編集後記

◎今回は、学芸員に焦点をあててみました。中日新聞にも糸井川先生が博物館について連載されておられます。ぜひ一読ください。

(S. A)

◎寄稿が多く、編集委員が記事集めをする心配がなく、次号もこの調子でと願っています。

(M. I)

◎奥村さんの写真を載せるために苦労しました。

(M. O)